

母の 642 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

詩／おじいちゃん 三木卓 2

わたしが読んだ童心社の本⑧／池内紀 3

お母さん、一人で悩まないで／園部まり子 4

みんな大好き！ 怪談オウマガドキ学園 6

新刊紹介／本多真紀、近藤君子 7

イラスト／二俣英五郎



E.F.

驚いた2通のお便り

得田之久

絵本をつくっていて一番気になるのは、読者の子どもたちにどう受けとめられているかということです。特に小さな子どもの為の絵本づくりには、マニュアルもなければ、蓄積されたデータも乏しく（幼児絵本の歴史はとても浅いのです）、大変苦労します。ましてや、作者（僕）は70代の老人ですから、過ごした赤ちゃん時代はるか昔のことです（もっとも歳を取ると赤ちゃんに戻ると言われていますから僕は適任かもしれません）。

暗中模索と不安のなかで創作している僕の元へ、今年に入り2通のうれしいお便りがとどきました。

ひとつは、福音館書店から発行した『ちゃぷちゃぷ ぷーん』（及川賢治 絵）という絵本へのお便りです。「初笑い（声）」というタイトルがついたハガキで、当時4か月の息子さんが、絵本の中の「さるさん、さかだち、おっとっと」というフレーズを読んだときに声をだして笑ったそうです。それが息子さんの初めての笑い声だと気がついたお母さんは「この子はこんな声で笑うんだ」と感激したそうです。その後息子さんは絵本を通して、笑ったり怒ったりとどんどん表情が豊かになっていったとのことでした。

それから、もう1通は、童心社発行の『むしたちのおんがくかい』（久住卓也 絵）に対するお母さんからの長い長い感動のお手紙でした。息子さんが生後6か月の頃、大変重い難病にかかり手術をすることになり、親子共々苦しくつらい日々を過ごしていたとき、たまたま病院にあった『むしたちのおんがくかい』にであったそうです。それまでもお母さんは息子さんを励まそうとたくさんの絵本を読んでいたそうですが、この本が一番のお気に入りです。表紙を見ただけで「ニコッ」と笑い、虫の鳴き声には「あーっ」と声をだし、電車のでてくるページがくると必ず笑い声をだしたそうです。体を動かすこともできない入院生活のなかで、この本にであいとても救われたというお手紙でした。

これらのお便りを読んで驚いたのは、1歳にも満たない小さな子どもたちが、絵本の世界をしっかりと受けとめ、感じ、考えて楽しんでいるということです（勿論、それを引き出すには、絵の力や親御さんの愛ある対応が不可欠ですが）。特に『むしたちのおんがくかい』はもう少し上の子どもの対象につくった絵本でしたから、このお便りは、今後の僕の絵本づくりにおいて、色々なことを考えさせてくれるものになりそうです。

（とくだ ゆきひさ／絵本作家）

さんすうをやっていたら

みみのうしろが すうすうした

まどから おつきさまが

たかくひかっているのが みえた

ああ とおくで

いぬが ほえている

こんなとき おじいちゃんが

「やきぶた くいてえな」

と げんきなこえで どなっていたのを おもいだす

ほんとうに げんきなこえだった

「おい こぞう キャッチボールだ！」

こしがいたいくせに いばるんだ……

おつきさまに くもがかかるころ

ひこうきの ばくおんが うごいていて

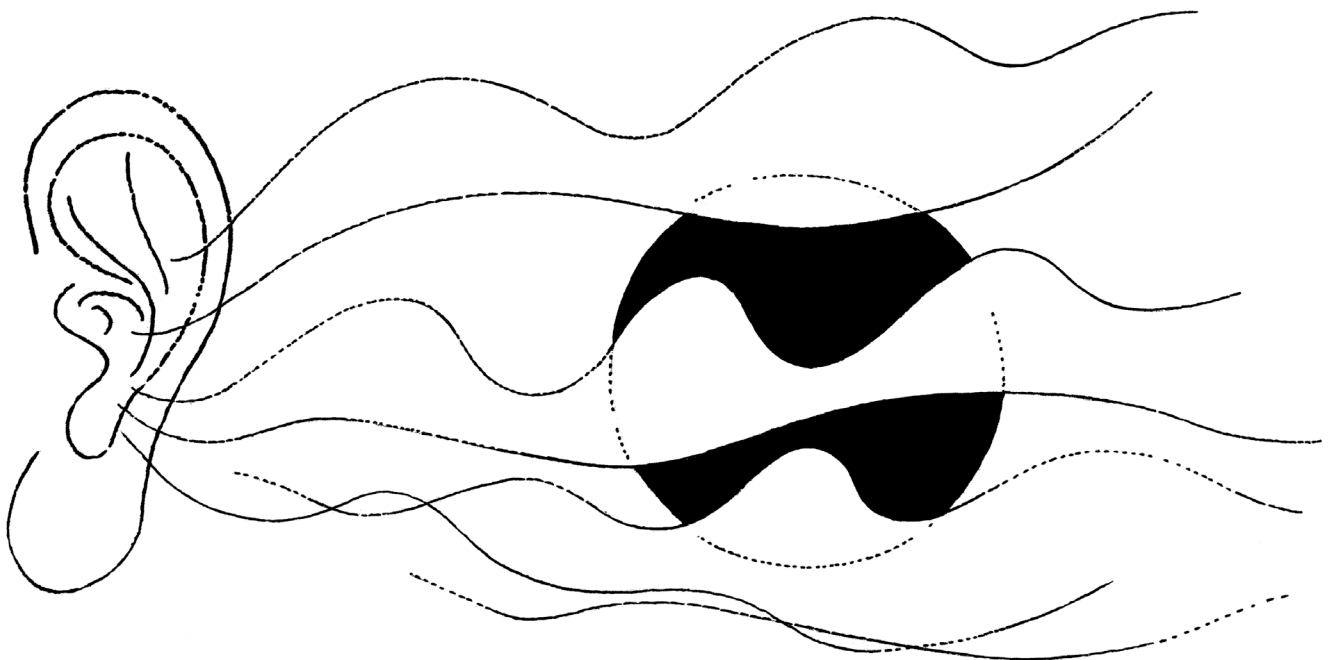
だんだんとおくになっていった

おじいちゃんが いたころより

すこし パソコン うまくなった

やきぶたは にかい たべた

おじいちゃん



三
木
卓

みき たく／1935年生まれ。詩人、作家。
詩集『東京午前三時』でH氏賞、
短編「鶏」で芥川賞、童話『ぼたぼた』で
野間児童文芸賞を受賞するなど、幅広い分野で活躍。

絵 | 谷口広樹

創業60年記念

わたしが読んだ童心社の本 8

モノたちの弾劾

だんがい

池内紀

いけうち おさむ／一九四〇年、兵庫県生まれ。ドイツ文学者、エッセイスト。主な著書に『ゲーテさんこんばんは』（桑原武夫学芸賞）、『海山のあいだ』（講談社エッセイ賞）、『二列目の人生』（恩地孝四郎）（読売文学賞）、『亡き人へのレクイエム』など。



アーサー・ビナード／作
岡倉禎志／写真

広島に原爆が投下されたのは一九四五年八月である。『さがしています』の刊行は二〇一二年七月。六十七年後になお、これだけ鮮烈な弾劾ができる。何一つ風化していないし、何一つ風化させない。大惨事をもたらした者たちへの断罪に時効はない。

広島市の平和記念資料館の遺品から十四点が選ばれた。理髪店の時計、十二歳の男の子が両手につけていた軍手、レイコさんの弁当箱、セツコさんのワンピース……。いずれも一瞬にして「孤児」になった。時計は時を失い、軍手の持ち主は行方知れず、弁当箱はひしゃげ、セツコさんはワンピースの中で息が絶えた。炭化した弁当を食へてはならない。

それでも ぼくは さがしているんだ。

レイコちゃんが いえなかった

「いただきます」を。

アーサー・ビナードは一九六七年、アメリカ・ミシガン州の生まれ。大学を出て来日し、「日本語の中へわけ入って」学び、数年後、広島で「ピカドン」を知った。その一語がまさしく「生きた言語感覚」として核分裂をとらえている。それに相当する英語はないと気がつき、「課題を背負った思い」がしたという。以来十数年して『さがしています』で、めぐり二つの課題を果たした。

言葉が何よりの手引き役になったのが、いかにも詩人らしい。ここでは「ピカアアアアアッ」と表記されているが、原爆は閃光を発して炸裂すると、核分裂が「小型の太陽」をつくる。広島では直径約二

百八十メートルの火の玉だった。中心温度は百万度をこえ、周辺の地上温度は三千〜四千度にのぼり、一瞬にして人体が消滅する。『さがしています』最後の十四番目が語るとおりである。その日の早朝、銀行へやってきて正面の石段に腰かけ、扉のあくのを待っていた人は、ただ一つの黒い影となって石にしみついた。

いらつしゃいませ

あなたも ここに すわってみませんか？

わたしは おしりの

ぬくもりを さがしています。

十四の「カタリベ」の主たちの半分は十代の少年、少女である。「学徒動員」の名のもとに市中で働かされていた。目覚めた生命が、ごく素直に生きようとしたとたん、凶悪な国家が使いつぶした。

作者がモノに託して語ったのは、すべてを客体化するためだ。日本人の好きな情緒や感情は一切いれない。末尾につけられた「この本のカタリベたちのプロフィール」が、ひそかな情報係である。タツヤさんの帽子は頭にへばりついて頭を守ったが、服は皮膚とくっついてはなれず、母親が缺で切りとった。傷口にわたいたウシはピンセットでつまみとった。がんばったが、タツヤくんはひと月と十日後に死んだ。

ビナードは学びとった日本語を不断に手入れして、強靱な反戦のメッセージをつつた。人間が平然とヒトに不正を働くなかで、モノたちがよく切れるナイフの鋭さで人間の正義を求めている。

お母さん、 悩まないで 一人で

そのへ まりこ/NPO法人
「アレルギーを考える母の会」代表

乳幼児とアレルギー

喘息やアトピー性皮膚炎、食物アレルギー、鼻炎・結膜炎、花粉症などアレルギー疾患の患者は増え続け、今やその割合は国民の二人に一人に近づいているとされています。アレルギーの病気は食物アレルギーや喘息のように命にかかわるものから、花粉症のように生活の質を長く損ない学業や仕事にも影響するもので症状が幅広く、かつ患者は全年齢層に及び、成長の段階で過ごす保育所や学校などでの理解や支援が求められるなどの特徴があります。

乳幼児期は、湿疹と食物アレルギーで悩むお母さんが少なくありません。湿疹は、アトピー性皮膚炎の本格発症につながるケースが多い症状です。食物アレルギーは、東京都の調査によると、三歳までに二〇〇の子に症状があり、一六・五%が医師による診断を受けていました。

現在の適切な医療に出合うまでの期間(左)と、それまでに受診した医療機関の数(右)

期間	人数	機関の数	人数
半年	6人	0か所	3人
1年	4人	1か所	2人
2年	5人	2か所	6人
3年	6人	3か所	7人
4年	1人	4か所	6人
5年	8人	5か所	9人
6年	7人	6か所	2人
7年	2人	7か所	4人
8年	1人	8か所	0人
9年	1人	9か所	1人
10年	0人	10か所	1人
11年	0人	11か所	1人
12年	3人	12か所	0人
13年	0人	13か所	0人
14年	2人	14か所	2人
		30か所	1人

表1 (未回答1)



「アレルギーを考える母の会」
おすすめの紙芝居
『たべられないよ アレルギー』
井嶋敦子/脚本
鈴木幸枝/絵

症状のコントロールがつかなかった頃の悩み

表2

喘息 ●喘息気味だと言われていたが、喘息なのか分からなかった ●日中の受診時は喘鳴がしない場合が多く、「大丈夫」で終わってしまう ●伝染病を疑われ、学校に行きづらかった ●「根性がないから発作に負ける」と言われた	アトピー性皮膚炎 ●医師が患者を治すことを諦めている ●医師と看護師の言葉にたくさん傷付けられた ●自分のせいで子どもがこんなことになったのだと自分を責めた ●掻き傷がひどく虐待を疑われた。いじめられた	食物アレルギー ●近所のアレルギー科すべてで「こんな子診られない」と断られた ●わが子が死ぬかもしれないという恐怖と背中合わせの生活をしてきた ●食事のことを考えると手が震え、台所に立つと涙がこぼれ苦しくなった ●「何か起きると怖いので」と園や学校での対応を断られた
--	---	---

乳幼児期に発症する食物アレルギーは、成長に伴って喘息やアレルギー性鼻炎などを発症していく、いわゆる「アレルギーマーチ」の発端となることがあります。この時期、アレルギーの病気を正しく理解し適切に対応することが特に大切ですが、「どうしたらいいの?」と、多くのお母さんたちが悩んでいます。

「母の会」の活動

私は、重篤なアレルギーに苦しむ息子が専門医と出会い劇的に健康を回復したという経験から、同じ病気に悩んだお母さん十人とともに、「アレルギーを考える母の会」の活動を一九九九年にスタートさせました。適切な医療を知って健康を回復してもらうための相談活動を中心に、専門医に学ぶ講演会や懇談会、社会的な課題の解決へ向けた行政などへの情報提供や提案活動を続けています。

「母の会」には、子どもを医療機関で受診させているにもかかわらず治療に希望が見いだせず、悩み抜いた保護者からの相談が全国から寄せられます。わが子のために頑張ってきた来し方を丁寧に向い、同じ当事者として頑張りをねぎらう言葉をかけると、電話の向こうで涙する方も少なくありません。その上で必要な情報

を提供すると、適切な医療や対応を理解され、多くの方は医療機関を変え、ほとんどの子どもが健康を回復するだけでなく、保育所などでの課題も解決していけるようになります。

適切な医療に出合う難しさ

驚かれるかもしれませんが、患者にとって現在のアレルギー医療は「くじ引き」のようなものと言っても過言ではありません。アレルギー医療は近年急速な進歩を遂げ、子どものアレルギーは適切な医療のもとで、ほとんどの子が症状なく暮らすことが可能になっています。にもかかわらず地域の医療が追い付かず、たまたま受診した医療機関の治療方針で、その後の人生が大きく左右されてしまうようなことが起きています。

基本的に、医師免許さえ持っていれば、専門分野や経験年数に関わらず、医療法に定められたどの診療科の看板を掲げてもよい、という日本独特の「自由標榜制」が、この事態を増幅させているようです。

今年七月、「母の会」は、滋賀県で行われた日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会で、大会長の要請を受け患者の实情を報告しました。この発表のために、適切な医療に出合った子どもの保護者四

十六人から、各地の患者支援グループを通して声を寄せてもらいました。適切な医療に出合うまでの「期間」と、それまでに受診した「医療機関の数」(表1)は、戸惑う患者の姿を浮き彫りにしていました。もちろん医療の側にだけ問題があるとは言えませんが、適切な医療に出合うまでの期間は中央値で五年、中には十四年という人もおり、受診した医療機関の数も中央値で四か所、最大では三か所の小児科や皮膚科を受診していた人もいました。

追い詰められる親子

「症状のコントロールがつかなかった頃の悩み」として寄せられた声(表2)からは、喘息では「診断してもらえない」「周囲に理解されない」、アトピー性皮膚炎では「いつまでこんなにいるんだ」と医師に怒鳴られた」「虐待を疑われた」、食物アレルギーでは「診療を拒否された」「学校や園で対応を断られた」など、親子が追い詰められていく様子が明らかになりました。

適切な医療への理解を欠いた学校や保育所の対応も過剰に走りがちです。例えば食物アレルギーの重篤な症状から命を救う自己注射「エピペン」を持つ子を保

育所に受け入れない自治体があるのは大変に残念です。

取り組みの進展

こうした課題を抱えたアレルギー疾患への幅広い対策を盛り込んだ「アレルギー疾患対策基本法」が、二〇一四年六月に国会の全会一致で成立しました。そして、この法律に基づいて設置されたアレルギー疾患対策推進協議会での議論を経て、今年三月に「アレルギー疾患対策の推進に関する基本的な指針」が、厚生労働大臣により告示されています。

この指針には、EBM (Evidence Based Medicine) 科学的根拠に基づく医療)に則って、患者が、全国どこに住んでいても適切な医療を受けることができ、疾患に関する良質な情報を入手したり相談したりすることができ、さらに学校や保育所、学童、職場、高齢者施設、障害者支援施設などで適切な支援を受けることができるような体制を整備していることが示されています。また、それを支える保健師、栄養士などの専門職を育成すること、疾患の研究を戦略的に推進することなどが盛り込まれており、着実な取り組みの進展が期待されています。

いま、悩んでいる方へ

でも、いま悩んでいるお母さんたちには、施策の進展を待っている余裕はありません。アレルギーの病気や適切な医療を知るため、現段階では東京都が運用している「アレルギー情報navi」(<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/alleigy/>)と(独)環境再生保全機構の「ぜん患などの情報館」(<https://www.erca.go.jp/yobou/zensoku/>)で最新の情報を得ることをお勧めします。またそれぞれのアレルギー疾患には、科学的根拠に基づく最良の治療を示した指針書「診療ガイドライン」が学会から示されています。ポイントとは専門医であるなしにかかわらず最新の「診療ガイドライン」に沿った標準治療が行われているかどうかです。受診しているのに、痒みや発作で眠れないなど症状が改善しないケースでは、成長障害をきたしたり、時には命に関わることもあります。お母さん、そんな時も一人で悩む必要はありません。繰り返しになりますが、アレルギー医療は近年急速な進歩を遂げ、子どものアレルギーは適切な医療のもとで、ほとんどの子が症状なく暮らすことが可能です。少し遠くてもアレルギーに精通した医療機関を受診しましょう。

みんな大好き! 怪談オウマガドキ学園

子どもたちが大好きな怖い話、不思議な話をあつめたアンソロジー読み物「怪談オウマガドキ学園」。シリーズ25巻の刊行を記念して、これまでに寄せいただいたたくさんの読者の皆様の声をご紹介します。



表紙がかわいくて、学校のみんなに「かして～かして～」ってたくさんいわれて人気者になりました。感謝してます！（11歳／女の子）



すっごくゾクゾクしました!! ほかに「怪談ウラメシヤ学園」なども出して下さい！（11歳／男の子）

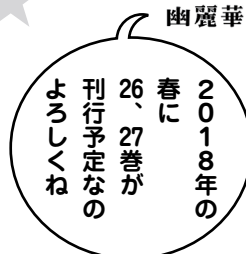


ぬらりひょんぬらりん

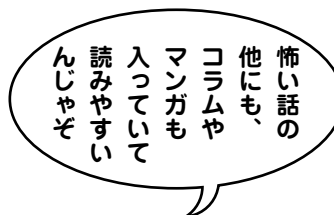
ガイコツの絵がとてもこわかった！
人面犬助がかわいい！（9歳／男の子）



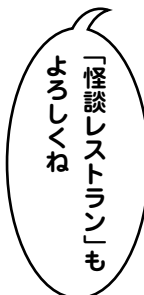
こわい話が好きなのでとても読んで良かったという気持ちになりました。妹にも読んであげられるので、仲良くすることができました。（8歳／女の子）



「怪談レストラン」が大好きなので、「怪談オウマガドキ学園」もレストランの仲間だと知ってびっくりしました。絵も好きで楽しく読みました。（9歳／女の子）



たまに親子で1話ずつ音読し合っています。感想を話したりして貴重な時間になりました。（40歳／女性）



小学2年生の息子が夢中で、2時間ほどで読み終わりました。集中力がないと思っていたので驚きました。怪談ですが、イラストも可愛らしいので手に取りやすいと思います。（36歳／女性）

BOOK

不思議、わくわく、ほっこり。



『おんなじおんなじ ももんちゃん』

とよたかずひこ／さく・え
本体価格800円＋税

本多真紀

今年の夏、仙台文学館では原画展「とよたかずひこ絵本の世界」を開催しました。お客さまの様子を拝見していて確信したのが、「みんな、ももんちゃんが好きなんだ！」ということ。歩きはじめたばかりぐらいの子が真っ先にももんちゃんのパネルに近寄っていったり、とよたさんによる読み聞かせ会では『どんどこ ももんちゃん』の絵本が登場したとたんに歓声が上がったり。子どもにも大人にも、ももんちゃんは大人気。ももんちゃんがみんなを笑顔にしてくれます。

その「ももんちゃん あそぼう」シリーズの19作目となる『おんなじおんなじ ももんちゃん』。雪が降るなか、ももんちゃんがおむつ姿で「よいしょ よいしょ」と雪だるまを作っています。（寒くないの？ いえいえ、ももんちゃんは「スーパーあかちゃん」だから大丈夫！）そこにおなじみのきんぎょさん、さぼてんさん、おばけさんがやってきてお手伝い。ももんちゃんそっくりの雪だるまができてあがります。そのあとのお話がちょっと不思議で、わくわくするのです。そして、ほっこりした気分になります。

これからの季節にぴったりの1冊。読み終わったあと、ももんちゃんたちと一緒に遊びたくなってきました。なるほど、みんなももんちゃんが好きになるわけですね。

（ほんだ まき／仙台文学館学芸員）

私が勤めている小学校の図書館は、地域にも開かれ、0歳の子からお母さんとやってくる。新しいことに会える場所、おもしろいことを見つけたら、さらにその世界を広げられる場所。そういう図書館になればと思い、館内の展示や読み聞かせのときには、ひとつのテーマでも、絵本や読み物、図鑑などいろいろなタイプの本を紹介するように心がけている。

いろいろあるやさいの本の中で、「どーんと やさい」シリーズは、絵本ならではの魅力がいっぱいだ。まず、やさいのいろいろな表情を丁寧に描いたいわさゆうこさんの絵が、子どもたちをひきこむ。新刊『ににんにんにんじん』のにんじんも、まるで本物のよう。畑からぬいて泥を洗ったあとのにんじんは本当に光って見え、その力が伝わってくる。子どもたちはその絵からいろいろ発見をする。

「えー、白いにんじんまであるの？」「こんなに細長いのもにんじん？」

大人の私も驚きながら読んだ。

「すっぽん すっぽん すっぽんな」などのリズムカルで心地よい言葉も魅力。絵本のフレーズを、子どもたちが一緒に口ずさむ。まるで、幼い子どもたちの心に、直接やさいの生命力がしみこんでいくようだ。

これから子どもたちに手渡していくのが楽しみな1冊だ。

（こんどう きみこ／日本子どもの本研究会・図書館司書）



『ににんにんにんじん』

いわさゆうこ／さく
本体価格1100円＋税見ごたえ充分！
にんじんパワー！

近藤君子

BOOK

11月の新刊図書！

童心社60周年記念出版

単行本図書

紙芝居百科

紙芝居文化の会／企画制作

本体価格 1300円＋税

Q&A方式で、紙芝居の魅力、絵本との違い、演じ方、国際的な広がり、歴史など、紙芝居のすべてにお答えします。厳選したおすすめの紙芝居をカラーで紹介！ パラエティー豊かな紙芝居の世界が、この1冊に凝縮されています。



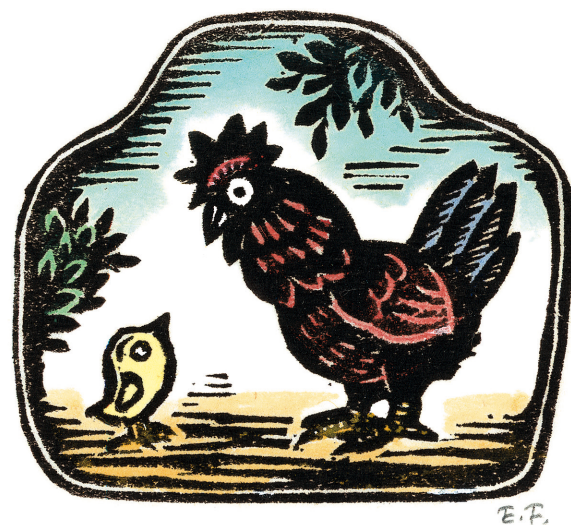
読者からのお便り

毎月「母のひろば」を楽ししく読ませてもらっています。読み聞かせ活動の紙芝居、絵本選びのツールとしても重宝しています。

書店の「おはなし会」では、子どもたちの年齢の幅が大きく、読む絵本の選書に苦労しています。紙芝居も毎回取り入れ演じています。今人気の紙芝居は「ロボットポコペン」はじめてのおるすばん（若山甲介／脚本・絵）です。大抵の子どもたちは一人で留守番をしたことがあるようで、その時の不安な気持ちを思いだしてか、ポコペンの行動にハラハラしながら聞いてくれます。最後に大声で近所の人を呼び、助けてもらったシーンでは、わがことのようにホッとした顔をしてくれます。

次は何を演じようかなあ？
(京都府 H・M)

ひきつづき、
お便り、
お待ち
しています。



イラスト／「保英五郎」

2017年11月15日発行（毎月刊）

母のひろば 第642号
定価50円（年600円／送料とも）

発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話03(5976)4402
編集発行人：大熊悟
童心社のホームページ：
<https://www.doshinsha.co.jp/>
フォーマットデザイン：bise inc.

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌（無料）と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円（送料とも）。



あとがき

●11月の勤労感謝の日については、子どもの頃から「誰が誰に感謝するの」とツツコミを入れていましたが、元々は新嘗祭の日だったそうです。その年の収穫を祝い神に感謝することだったんですね。これは宮中儀式ですが民間では、田畑を守ってくれた神に感謝し山にお帰りいただく行事だったようです。「神様、お疲れ」という感じでしょうか。◎

●先日、祖父が102歳の長寿を全うしました。2歳の我が子とはちょうど100歳違い。1世紀という時に、畏敬の念を覚えます。赤ちゃんのときに力強く抱っこしてくれたひいおじいちゃん、2歳の子にどう理解させようか悩み、『くろくとなぞのおぼけ』を読みました。ねずみのおじいさんと違って、天国で祖母と元気にけんかしていそうなのですが。▲